

令和元年5月27日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16935

研究課題名(和文) 古代末期エジプトにおける農村社会と家族

研究課題名(英文) Rural Society and Family in Late Antique Egypt

研究代表者

高橋 亮介 (Takahashi, Ryosuke)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10708647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エジプトから出土するギリシア語パピルス文書を用いて古代末期の農村社会の状況を明らかにするために、4世紀のファイユーム地方由来の3つの文書群を最新の研究成果に照らし合わせて分析した。古代末期の衰退状況を示すために言及されることの多い当時のファイユーム地方は、個々の村落や家族の置かれていた状況や地方内の地域差や砂漠地帯との関わりを考慮して慎重に理解されるべきであり、また帝政前期との連続性も重視されるべきである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、国際的にも国内においても研究の進展が著しい地中海世界の古代末期研究について新たな光を投げかけるものである。いまだ十分に論じられることの少なかった農村社会の状況を、エジプトから出土するギリシア語パピルス文書から明らかにしようとした。ただし、豊富な史料と多くの先行研究の精査からは、古代末期に先立つローマ帝政前期からの急激な変化を見出したり、なんらかの画一的な社会像を提示するには慎重にならざるを得ず、むしろ多様性が浮かび上がってくるのである。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed three papyrus archives originated from the fourth-century AD Fayum and reconstructed Egyptian rural society in order to elucidate several aspects of the Mediterranean world in late antiquity. While the Fayum has been regarded as an area which suffered a rapid decline during the third and fourth centuries, a close examination of the evidence and recent studies suggest the diversities within the region as the circumstances of individual settlements and families were different.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：エジプト パピルス 古代末期 ローマ帝国 ローマ軍

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 地中海世界において後3世紀から7世紀にかけての古代末期が危機と衰退の時代であったとの認識に異が唱えられて久しい。外民族の侵攻をはじめとする内憂外患に対しローマ帝国が生き残りをかけ皇帝権力の拡大、社会諸階層への統制と徴税の強化などをもってして強制的な支配を試みたとの通説は国外はもちろん国内の研究者たちの精力的な実証研究においても覆され、逆に古代末期に独自の発展と活気を認める見解もある。このように内外での研究の進展の著しい古代末期研究であるが、ローマ史の中心史料である叙述史料と金石文史料のみならず、法文や教会人の著作が残されており、それゆえ研究の余地はなおも多く残されている。とりわけ研究上の空白となっていたのが、エジプト独自の出土文字史料であるギリシア語パピルス文書による農村社会の分析である。パピルス文書史料は日常的に作られた行政文書や私的な契約書を含んでおり、古代史研究においてアプローチが難しい、社会の中下層および農村地域の様相を探ることを可能にしてくれる。

(2) 長い学問的伝統をもつパピルス学は、その視野をエジプトに限定することが一般的であったが、近年、古典文献史料を通じて構築されたギリシア・ローマ世界像を相対化し、それゆえに豊かにできる利点が認識され、西洋古代史研究との有機的な統合が進みつつある。ただし、従来のパピルス学研究は、単一の史料類型や文書群の集成と精査および再校訂に重点を置く傾向がある。これに対して本研究代表者がかつて2世紀のエジプトを対象に行った研究でなしたような複数家族文書群の比較と関係を分析することにより、農村社会の再構成が史料状況さえ許せば可能であろうとの予想があった。

2. 研究の目的

研究の進展の著しい地中海世界における古代末期理解について、パピルス文書史料を用いたエジプトの農村社会の分析が貢献をなすとの見通しのもと、本研究は、4世紀エジプトのファイユーム地方（カイロの西南方向およそ100キロメートルのところに位置し、ナイル河から分岐した支流が作り出す湿潤な盆地地帯）の状況を同地方に由来する3つの家族文書群の精査と再検討から捉えることを目的とした。

この目的を設定した理由としては、第一に4世紀のファイユーム地方に由来する約千点の刊行パピルス文書のかなりの割合が、同地方北部の村落から出土した3つの家族文書群（それぞれ「アウレリウス・イシドロス文書群」「サカオン文書群」「アビンナエウス文書群」という名称を与えられている）に属しており、高い密度での残存を誇っていることが挙げられる。第二に、これらの文書群の校訂版は、いずれも古代末期研究が活性化する以前あるいは研究が深まり始めた1960年代または1970年代に出版されており、古代末期研究の現在の問題意識と水準と照らし合わせて、新たな知見が得られる可能性が高かったからである。

3. 研究の方法

(1) 本研究で分析する3つの文書群について、校訂版に収録されたテキストの読解を進めるとともに *Berichtigungsliste der Griechischen Papyrusurkunden aus Ägypten*、*Trismegistos.org*、*Papyri.info* といった冊子またはオンラインのデータベースを活用し、校訂版（および現行の校訂版出版以前になされた校訂）以降に提案された異読、出版された関連文献を網羅的に渉猟し、入手し検討する。

(2) 4世紀ファイユームの農村社会の特徴の把握に際して、研究代表者がかつて行った2世紀の農村研究の成果を比較対象として用いる。地主である複数の富裕者と小作人である農民とが比較的安定した経済関係を構築していたという2世紀の状況が果たして4世紀についても見いだせるのか、あるいはそれとは異なった状況が現れるかは、4世紀の状況の特異性を問う際に有効であるからである。

(3) 史料の検討と並行して「地域的環境」「行財政と司法」「経済活動」という3つの主題を設定し、史料そのものと二次文献から理解を深めて、各文書群あるいは複数の文書群から明らかにする点を考察する。

4. 研究成果

(1) 文書群の性格と内容の再検討

ファイユーム北西部テアデルフィアに由来する「サカオン文書群」のなかには、ファイユーム地方における水利用と耕作、納税が困難になっていく状況を示すとされ、多くの先行研究で言及される文書が含まれている。しかし文書群全体を検討した結果、農民の逃亡や役人への訴えは、住民たちが税を課す公権力との交渉を円滑に行うための手段とみなしうること、農業生産が難しくなり全般的に衰退していくように見られる村落内で、村落に留まることに何らかのメリットを見出し、権勢と財力を増していく人々がいた状況が確認された。したがって村落の住民が等しく貧困に向かっていったとは考えにくく、全般的な村落の衰退を必ずしも想定できない状況が明らかになった。

ファイユーム北西部の駐留軍の司令官フラウィウス・アビンナエウスの残した「アビンナエウ

ス文書群」については、司令官の任務中に作成・入手・保管した文書と、彼の妻とされた女性が保持していた私的文書という異なるタイプの文書から構成されていると考えられていた。だが後者のタイプの文書が実際には校訂者によって誤って文書群に帰属させられていたことを指摘した最新の研究論文に触れ、家族文書という枠組みでの理解が不適切であることが明らかになった。アピンナエウスが率いた部隊の機能については、部隊が駐留したディオニュシアス村が、西方砂漠とつながる交通の要所であったこととの関連で理解されるべきであるとの見通しを得た。これは、先行研究をおおむね追認するものであるが、2000年代以降に入ってから発表されている西方砂漠のローマ時代の遺跡の発掘調査の成果と照らし合わせると、西方砂漠におけるローマ軍の展開というネットワークのなかにディオニュシアスを位置づけ理解することがより一層重要となる。

最も点数の多い「アウレリウス・イシドロス文書群」の分析に関しては、当初の想定以上の関係史料があることもあり、特記すべき具体的な成果をあげるには至らず、今後の課題として残された。

(2) 検討対象とした文書群と関係した主題の分析に関して、成果が得られたのはファイユームの自然環境と砂漠地帯におけるローマ軍の機能についてである。

①古代末期に限定されないギリシア・ローマ期のファイユーム地方の自然環境に関して、先行研究を批判的に検討した。叙述史料やヘレニズム時代の開発により高く評価されてきたファイユーム地方の農業生産性であるが、必ずしもエジプト内でかなり高かったと見なすには慎重にならざるをえないこと、古代末期に印象的な史料をもってして伝えられるファイユームの周辺部の衰退は、その内部に地域差を有するファイユーム地方全般の衰退ではなく、自然環境の変化に応じて主体的な生存戦略を取る在地の住民の姿を見出すべきこと、史料がほとんど残っていないファイユーム中心部の理解のために、デルタ地方の自然環境や農業実践が参考になりうることなどが明らかになった。

②研究成果(1)と関連してローマ軍の砂漠での活動の重要性が認識されたが、そこから派生したテーマとして砂漠に駐留したローマ軍の残した史料と活動の実態について理解を深めた。ローマ軍はナイル川の東西に広がる砂漠を走る道路網の要所に展開したが、帝政前期から少数の兵士からなる部隊が広く薄く展開し、緊密な連絡をとっていた状況がコプトスとミュオス・ホルモスを結ぶ東部砂漠の通商路において見出すことができた。このことは、4世紀の西部砂漠、とりわけファイユームおよび、そこから道路がつながっている小オアシスのローマ軍の駐留地について、古代末期になって急速にその整備が進んだとする理解に対して一定の留保を付けて接せざるを得ない。西部砂漠そのものについての研究も示唆するように、古代末期以前からの配置と活動の連続性は軽視されるべきではない。

(3) 以上の具体的な成果の一方で、本研究が扱った史料を総体として理解し、古代末期のファイユームの農村社会像を示すのは現時点では慎重にならざるを得ないという、いささか否定的な結論をも得た。同時代のファイユームという地理的・空間的な限定を設けたにもかかわらず、3つの文書群はそれぞれ異なる村に由来しており、地域内の差異や文書群ごとの違いを重視すべきである。とりわけ同じファイユーム周辺部でも西部と東部では状況が異なり注意が必要である。ファイユーム西部は、農業生産の観点からすれば東部よりも厳しい状況にあったようだが、西部砂漠との結節点としての重要性を有していた。また西部の状況を示すとされてきた「サカオン家文書」は村全体の状況を十分に示すのか慎重な判断を要する。また史料から明らかになる状況については、4世紀に先立つ2世紀の状況との類似点も目立ち、検討した史料から明らかになる状況を直ちに古代末期の特徴とみなすことは難しいのである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

①高橋亮介「エジプト東部砂漠のローマ軍と『蛮族』」『軍事史学』54-2、2018年、59-78、査読有

②高橋亮介「作られる帝国の穀倉」『地中海学会月報』406、2018年、3-3、査読無

③高橋亮介「砂漠の縁のローマ軍：帝政後期の辺境軍の文書を読む」『歴史学研究』964、2017年、46-57、査読有

④高橋亮介「ギリシア・ローマ期ファイユームをいかに捉えるか：環境史研究の一動向」『イスラーム地域研究ジャーナル』9、2017年、32-44、査読無

[学会発表] (計2件)

① Ryosuke TAKAHASHI, Comments on CHEN Siwei 'Maritime Trade between Egypt and India during the First and Second Century: A View from the Muzuris Papyrus', The 11th

②高橋亮介「4世紀エジプトにおける軍隊と地方社会：ディオニシウス要塞とアビナエウス文書群をめぐる諸問題」古代史の会、2017年

〔その他〕

翻訳

①ブレンダン・ハウグ、高橋亮介(訳)「水を統治する：前近代ファイユームにおける灌漑と国家」『人文学報 歴史学・考古学』47、2019年、1-34、査読無

座談会記録

②三上喜孝、陶安あんど、高橋亮介、椎名 一雄、溝口優樹「出土文字資料が拓く歴史研究の可能性」『歴史学研究』964、2017年、68-76、査読無

6. 研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。